

第15話 松平定信の執政

田沼意次の悪政と、これを改めた松平定信の事蹟、寛政の治

吉宗は在職 30年の後、62才で隠居して、將軍職を子の家重に譲ったが、西の丸に移っても後、大御所と称して、家康や秀忠とおなじように、なお政治の指図をしていた。それで家重の時代の始めは、彼が親に肖ない愚物であったにも拘わらず、世はよく治まって、6年の後、吉宗が68才で薨じてからも、なお暫くの間は先づまづ無事のほうでした。

田沼意次

ところが、それから10年の後、家重の子の家治が將軍になると、寵臣の田沼意次が側用人から擢んでられて老中になり、ひとり威権をほしいままにしたのみならず、賄賂の多寡によって常に偏頗なことをしたので、幕府の政治は再び乱れ始めた。その頃の或る書物に、意次の言った言葉として次のように記されている。

「凡そ金銀は命にも替えがたい宝である。その宝を贈って、お役勤めご奉公を頼むは、実にその志が上に忠義なればこそである。但し、その志の厚薄は贈り物の多少でわかる。予は終日登城して、国家のために心を勞しているが、帰宅して、廊下に諸家からの進物が沢山ならんでいるのを見ると、忽ちその苦勞も忘れて、聊か心が慰むのである」云々と。

もとよりこれをそのまま実説として信ずべきではあるまいが、しかしそのころ賄賂が盛んに行われていたかの一端はこれで想像されます。現に意次の邸には、多くの大名や旗本が、殆ど毎日、ご機嫌伺いに日参して、贈り物の善美を競い、珍奇を争い、互いに相及ばないことを恐れたが、そのありさまは、まことに浅猿しい限りだったと言われています。

その上、この時代には、不思議なほどにも暴風、洪水、大火、飢饉などの禍が相ついで起こったので、人々は非常に苦しみました。ついには所々に暴民一揆なども起こるに至ったが、將軍は、何事も知らずに、いつも「天下は泰平である」とのみ意次から聞かされて、安心して、絵の稽古などをしていたのです。

田沼意次の斬殺

しかし、こういう悪政がいつまでも続くものでしょうか？意次の子の意知が天明3年11月に若年寄となつて、父子相並んで一層権勢を振るうようになると、ふだんから意知の奸悪を憤っていた旗本の佐野善左衛門政言という者が、その翌4年3月24日、殿中で今や退出せんとする意知を呼び止めて、これを斬った。その疵のために意知は4月2日に卒し、政言は牢屋に入れられて、4月3日に切腹させられた。

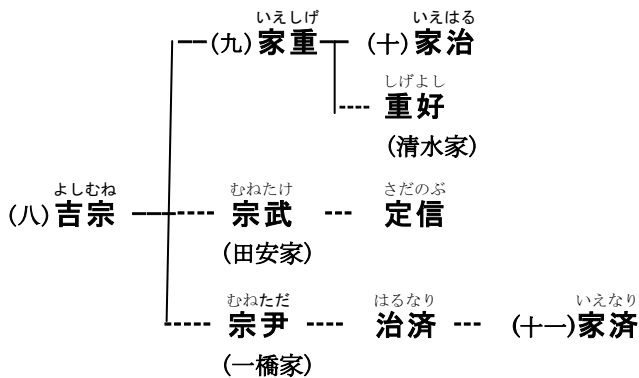
この時、政言の遺骸が親戚の者の願いで引き渡されて、浅草の東本願寺の徳本寺という寺に葬られると、誰言うもなく世直し大明神だとして参詣者が絶えなかつたので、寺社奉行が内々で注意して、こ

第15話 松平定信の執政

れを停めさせたということです。一方、意知の遺骸を駒込の勝林寺に葬送する途上では、所々で石や瓦を投げつける者があって、負傷者も出たということです。いかに田沼親子が世間から憎まれていたかがわかる話です。

さて意次は、子の意知が殺されて以来、次第に幕府の内外から憎まれて、その勢力を失うに至った。ついに翌々6年の8月に、将軍家治が病に罹り、その養子の家斉が職を継ぐことになると、意次は忽ちに退けられ、やがてその領地をも削られた。ついで9月8日、家治は50才をもって薨じた。

三卿
これより先き、八代将軍吉宗は、その子の宗武および宗尹に、それぞれに江戸城の田安門内および一ツ橋門内の邸を与えて、新たに田安、一ツ橋の2家を起こさせ、これを両卿と称したが、後、九代将軍家重がその子の重好を清水門内に居らせて、清水家を起こさせるに至って、合わせて三卿と称した。しかし、これらの3家に対しては、幕府は領地を与えず、ただ賄い料として毎年十万石を給することにして、蓋し、家康の時に封じた尾張、紀伊、水戸の3家が、既に将軍との血縁が遠くなったので、新たにこれに代わるべき3家を起こして、もし将軍家に子のない時は、先づ入ってその後を継ぐようにしたのです。



将軍家济

十一代将軍家济は、この三卿の中の一ツ橋家から出た。十代将軍家治の従兄弟の治済の子で、吉宗には曾孫(ひまご)に当たる。家治に子が無かったので、養われて子となり、その後を継いだ。将軍になった時は僅かに15才の幼少でしたので、御三家の人々が相談して、奥州白河の藩主松平定信を挙げて将軍の補佐役として、これに一切の政治を執らせることにした。

松平定信

定信もまた三卿の1家から出た。彼は田安宗武の子で、吉宗の孫に当たり、家济には従兄弟に当たります。幼い時から賢く、13才の時には既に『自教鑑』という書物を著したほどでした。18才の時に、奥州白河の藩主松平定邦の養子となり、26才でその家を継いだ。時に天明3年で、ちょう

第 15 話 松平定信の執政

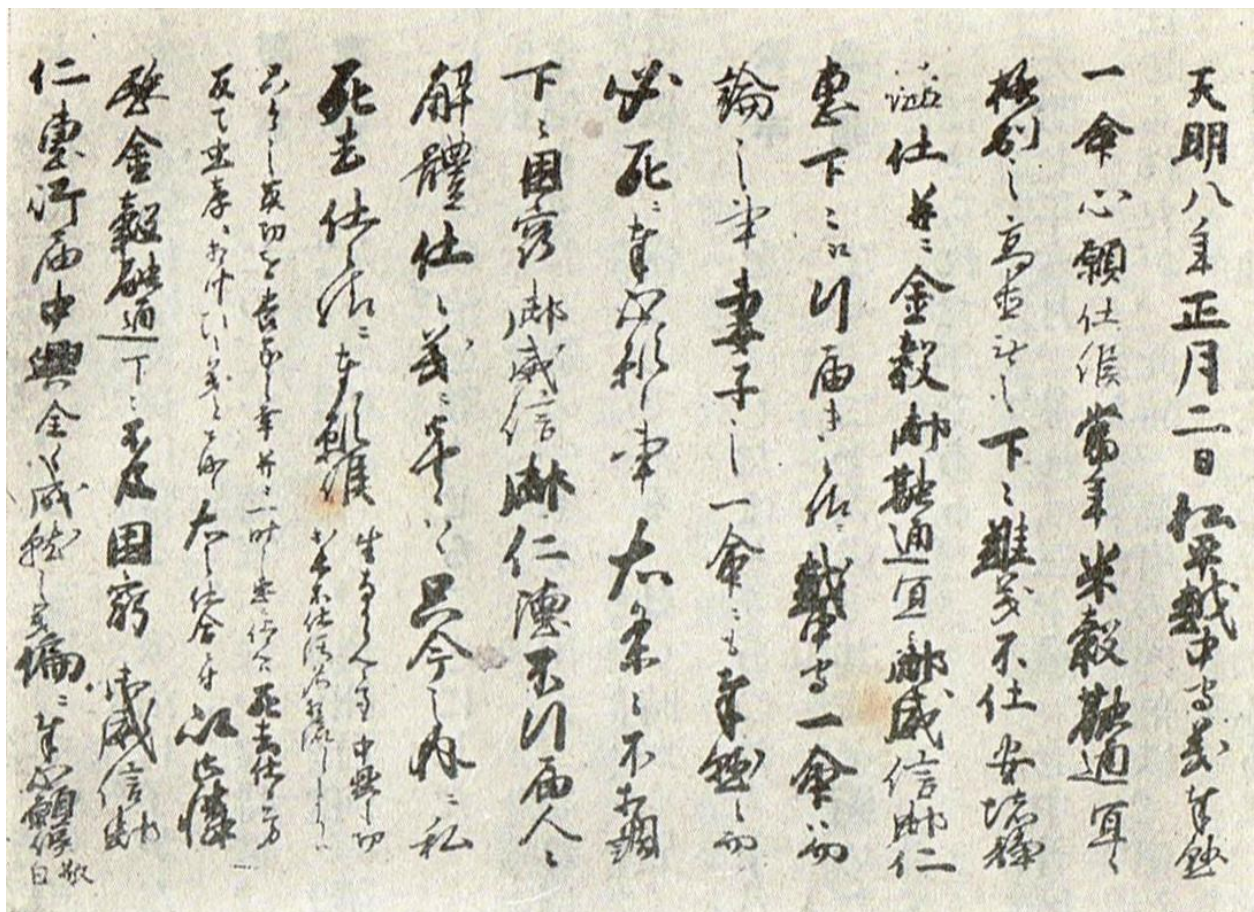
たぬまおきつぐ
ど田沼意次が若年寄に任ぜられた年です。

てんめい う こわ
天明の打ち壊し

てんめい しゆせき
天明 7 年 6 月、彼は 30 才で老中首席となり、その翌 8 年 3 月、特に將軍の補佐役に任ぜられたが、この時、幕府の内部は、たぬま きよくたん みだ いしん くわ
田沼の悪政によって極端に乱れて、その威信は全く地に落ちていた。加えるに、前代から引き継いだ数年間の凶作のために、各地に貧民の暴動が起こって、こめや ふごう あ
米屋や富豪を荒らしていた。いわゆる天明の打ち壊しというのがこれで、まことに容易ならない世の中になっていたのです。

けつし がんもん
決死の願文

さだのぶ すいせん からだ じたい たぬま あくせい かいかく
定信は御三家から推薦されると、身体が弱いとあって、一旦は辞退したが、田沼の悪政を改革して、
じゆんちょう もと さだのぶ
再び世を順調に戻すためには、どうしても定信を立てせなければならぬと思っていた御三家から、
ぜ ひ かさ しゅうしょく しょうだく
是非にと重ねてその就職を求められると、ついにこれを承諾した。



まつだいらさだのぶ がんもん
松平定信の願文

しかし、それには実に一大決心をしたのでした。 彼が老中になった翌 8 年の正月 2 日、予て信仰し
ほんじよ きつじょういん かんぎてん ひそ けつし がんもん おさ
ていた江戸本所の吉祥院の歓喜天に、密かに決死の願文を納めたのが、後になって発見されました。そ
れは、ここに写真を掲げてもおいた通り、自分の命は勿論、妻子の命もかけて、国民がみな米や金に不自
由しないように、幕府の威信も行き届くように、と願ったもので、もしこの願いが叶わぬならば、今のう
ちに自分が死ぬようにして下さい、と祈ったところに悲壯を極めた決心が窺われます。

第15話 松平定信の執政

けんやく しょうれい 儉約の奨励

さて定信は、すでに一身を捨ててかかってからは、着々と弊政の改革に向った。第1に先づ、彼は祖父吉宗の定めにならって、大名から一般国民に至るまで、厳しく奢侈を禁じ、衣服や家具の新調を見合させ、かりそめにも贅沢な品を用いず、平生勤儉して余りがあれば、飢饉などの用意にこれを貯えさせた。この時、定信はまた江戸の市民に命じて、その町費を節約してこれを積立てさせたが、この積立が積もり積もって、明治の頃には百数十万両となっていました。この金は、後、東京市の管理に移って、公益を進める元手となった。

かんせい さんはかせ 寛政の三博士

定信はまた当時の人々が一般に遊惰に流れているのを憂えて、先づ武士の風儀を正そうとして文武の道を励ました。すなわち、久しく中絶同様になっていた湯島の聖堂の学問所を開き、新たに柴野栗山(彦助)、尾藤二州(良助)、古賀精里(弥助)らの学徳のすぐれた民間の儒者を招いて、その教授とし、時の大学頭林錦峰(信敬)を輔けて、専ら朱子学を講じさせて、大名、旗本らに毎日これを聴かせることにした。ついでに言うが、この3人の学者を世間では、「寛政の三博士」と言ったが、またその通称に、いづれも「助」の字が付いていたために、「寛政の三助」とも言った。

ぶげい しょうれい 武芸の奨励

一方、武芸は、しばしば諸士の武術を閲して奨励を加えた上に、田沼時代に、市中の中洲を始め、神社の門前町や所々の火除地などに設けられた料理屋や娯楽所などを一切取り払って、その跡に大弓射場や馬場を設けて、諸士の馬術や弓術の練習場にあてた。又、遊戯などにしても、すべて武士の心身を鍛錬するのに役立つような、例えば角力とか、狩とかという勇ましいものを撰んでやらせるようにしたので、剣術、槍術、馬術、砲術などの達人が、四方から江戸に集まって道場を開き、到るところに武芸の練習が盛んに行われた。

そのころの狂歌師として有名な蜀山人(本名は太田覃、通称は直次郎、寝惚山人、四方赤良、四方山人、南畝などの別号がある)が、これを弥次って詠んだ狂歌がある。

世の中にか(蚊)ほどうるさきものはなし ぶんぶ(文武)というて夜もねられず
というので、いかに定信が文武の奨励に熱心でしたかが分かります。

きやうと たいか 京都の大火

定信はまた皇室に対して常に尊崇の眞を致したのでも聞こえています。彼が老中になった翌天明8年正月29日、京都に大火があつて、皇居、仙洞御所を始め、二条城も炎上して、その他、神社が220余り、寺院が128、公家、武家、町家を合わせて183,000余戸が消失したのみならず、焼死した者さえ2600余人にのぼって、その惨状は前代未聞と言われた。光格天皇は神器を奉じて火を下加茂にお避けになり、その夜は聖護院に幸され、後桜町上皇は昭高院に幸された。

これによって、幕府は皇居を造営するために、この年の3月に定信を造営総裁としました。

第15話 松平定信の執政

さだのぶ こうきよざうえい 定信の皇居造営

ところが、彼は予てから旧来の皇居が、一体に規模が小さく、昔の法式に合わないところが多いのを心に歎いていたので、その5月に京都にのぼると、古図その他を参考として、くわしく昔の法式をとり調べさせた上、自ら工事を監督して、大いに規模を拡めた。工事は翌々寛政2年の秋に竣工して、11月に天皇、上皇共に還幸された。以前と変わって、いかにも見事に、麗しく出来上がっているのをご覧になると、深くご満足に思われ、天皇は御製の詩を、上皇は御製の和歌を将軍に賜り、定信には太刀と朗詠集を賜って、その功を賞せられた。御製の詩は長いものだが、その中に、

「百工忽告、竣、整、駕自、東回、拭、目九重裏、
九重亦美哉、両殿応「規矩」、四門総崔嵬」

と詠じになっている。「出来上がったというので、帰って来て、目を瞠って宮城のうちを見ると、まあ、なんとという美しさであろう。紫宸殿も清涼殿も、昔の法式の通りで、承明門も、玄輝門も、朔平門もみな見事に聳えている」というほどの意味に拝誦する。又、上皇の御製の和歌には、

殿造りみがきたてたるうれしさの 心を見する大和言のは

というので、天皇、上皇と共に、いかにお喜びになったかは、これらの詩歌の上にも歴然と拝察することが出来ます。

にし せいてんし ひがし けんしょうい 西に聖天子ましまし 東に賢相出づ

なお、光格天皇は、すでに前にも述べた通り、新井白石の建議に基づいてご創立になった閑院宮家から入って位に即かれた方で、頗る英明で情けも深くおわした。一方、定信が、わづか数年の間に田沼の弊政を全く廓清して幕府の威信を回復し、世に寛政の治といわれるような善い政治をおこなったので、天下の人々は、「西に聖天子ましまし、東に賢相（賢い宰相）出づ」と言ってこの時代を賛美した。

しよはん ち 諸藩の治

上の赴くところは下の従う習いです。このころ、諸大名にも賢君が輩出した。中でも殊に聞こえたのは、米沢の上杉治憲（鷹山公）、熊本の細川重賢（銀台公）、紀伊の徳川春貞、長門の毛利重就らです。いづれもよく領民を愛して、勤儉貯蓄の風を勧め、大いに産業を奨励して、しきりに仁政を施した。わけても上杉治憲は学を好み、細井平州（徳民）を聘して大いに文教を興したのも有名です。

ロシアの使いが来る

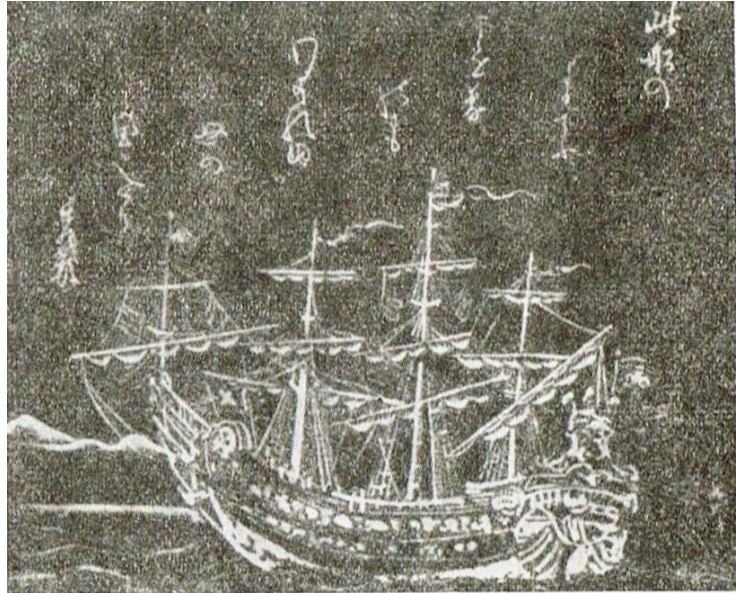
こうして国内はよく治まり、人々は安心していたところに、思いもかけない憂いが外から起こった。さきに第109代明正天皇（女帝）の寛永16年（西暦1639年）7月、三代将軍家光が国を鎖してから150年余り、西洋諸外国との交通は、僅かにオランダ1国を除く外は、全く絶えていたのに、たまたま第119代光格天皇の寛政4年（西暦1792年）9月、ロシアの使節ラックスマンが軍艦カザリン号でわが国の漂流民を送って北海道の根室に来て、初めて通商を請うたのです。

第15話 松平定信の執政

さだのぶ かいがんじゅんし 定信の海岸巡視

幕府は例の鎖国の事を告げて、これを帰らせたが、これより先、国内でも既に林子平の如きは、しきりに海防の必要を説いていたので、定信もこれから俄かにその必要性を悟った。

翌寛政5年の春に、先づ江戸近くの海防策を立てるために、自ら股引、草鞋がけで、険しい山や谷をも越え、宿の無いところでは野宿もして、数多の困難を忍びながら、伊豆、相模などの海岸を巡視しました。



まつだいらさだのぶ さん
松平定信が贅をした外国船の図

さだのぶ かつ がいこくせん か
定信は嘗て外国船を描かせて、これに題して、

この船のよるてふことを夢の間も わすれぬは世の宝なりけりと詠んだ。 彼が日夜、海防の事に心を労したのは、これによっても知られます。

しらかわ らくおう 白河の楽翁

しかし、仔細があつて、彼はこの視察から帰ると間もなく、補佐役を免じられたので、海防については何ら施すところもなく終わった。 かれの在職は僅かに7年でした。 職を罷めてから19年の後、55才で家をその子に譲り、楽翁と号して風月を共にしながら、余生を送った。 定信は文章や和歌にも巧みで、多くの書物を著したが、中でもその随筆『花月草紙』は名著として知られている。 また武芸にも達し、殊に柔術を善くしたといわれる。 第120代仁孝天皇の文政12年5月13日に72才で卒した。 其の墓は東京市深川（現江東区白河）の靈巖寺に在る。

のち さだのぶ おく
後に、明治天皇は定信に正三位を贈りました。

第 15 話 松平定信の執政

(第 15 話 松平定信の執政 終わり。 次は前頁に戻り、第 16 話 文化文政時代と天保の改革 に)